万葉集②

万葉集・・・奈良時代　現存する日本最古の歌集。
素朴で雄大。生き生きと力強い

長歌

天地(あめつち)の 分れし時ゆ 神(かむ)さびて 高く貴(たふと)き 駿河(するが)なる
富士の高嶺(たかね)を 天の原 振り放(さ)け見れば 渡る日の 影も隠らひ
照る月の 光も見えず 白雲(しらくも)も い行(ゆ)きはばかり 時じくそ
雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は

山部　赤人(やまべのあきひと)

天と地の分かれたときから、神々しく高く貴い、駿河の国にある富士山の高嶺を、広々とした大空に振り仰いで遠くを見ると、空を渡る太陽も隠れて、夜の空に照る月の光も見えず。白雲も富士に行く手をはばまれて、いつでも雪が降っている。後世にも語り伝え、継いで行こう、この富士山のことを。

神さぶ→神々しい　振り放け見るれば→振り仰いで遠くをみると
い行くはばかり→はばまれて行き滞り　時じくそ→時期を定めず、常に
文法「そ～ける」→係り結び
富士の高嶺は→倒置法

ポイント　富士山の偉大さ雄大さをよんだ歌

反歌　長歌の後に添えられ長歌の意味を要約したり補足したりするもの

田子の浦ゆ うち出(い)でて見れば 真白(ましろ)にそ 富士の高嶺に　雪は降りつつ

田児の浦を通って出て見ると、おおなんとまっ白に富士の高嶺に雪が降っているよ。

田子の浦ゆ→田子の浦を通って　句切れ→句切れなし

ポイント
長歌に添えられた長歌の意味を要約したり補足したりする短歌である